



標高4,200mのダガラトレック・ラバタマキャンプサイトにて。手前に咲く花はブータンの国花、ヒマラヤンブルーポピー

私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.59



きのこ栽培の技術と知識を生かし JICA海外協力隊として支援活動

元福島県職員

熊田 淳さん (65歳) 2020年退職

【くまた・あつし】1959年、福島県郡山市出身。大学院で資源・環境学を専攻し、1988年に博士課程修了。1989年に福島県に入庁、2020年まで農林水産部職員として主にナメコを中心とするきのこ関連研究と特用林産普及業務を担当した。定年後2年間、専門員として勤務した後、2022年からJICA海外協力隊のきのこ栽培隊員としてブータン国立きのこセンターで技術支援活動に従事している。学生時代は柔道部に所属し、社会人になってからは居合道と八光柔術に長年励んできた。趣味は国内外の秘境二輪ツーリング。ブータンではヨガ、瞑想、トレッキング、柔道を楽しみながら心身の健康を維持している。



国王にFAOプロジェクトの概要を説明するため民族衣装で正装（写真右が熊田さん、左はナメコ担当職員）

熊田さんは福島県職員として長年きのこに関する業務を担われていたそうですが、定年後のことはいつ頃から考えていたのですか。

東日本大震災以降、未知の分野の放射性物質関連研究に従事し、次々に起こる行政上の難題や研究と格闘する中、定年まで残すところ一桁の年数になった頃、途上国で支援活動をしたという学生時代の夢をふと思い出しました。そこから、定年後にこれまでの業務で得たきのこ栽培に関する技術と知識を、途上国において社会還元する方法を真剣に考えるようになりました。

なぜJICA海外協力隊に応募しようと思った?

当初は、国連機関の公募を検索しましたが、どれも海外での一定期間の業務経験が必須要件でした。それでJICA海外協力隊について調べてみると「開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与」「ボランティア経験の社会還元」などの目的が、自分のやりたいことも合致することがわかり、応募しようと決めました。

応募のため、どんな準備をされましたか。

応募には募集案件ごとに異なる、一定のTOEICスコアが必要でした。そこで初めてTOEICを受験したのですが、問題数の多さに圧倒されて目標スコアを下回る結果に終わりました。準備不足を反省し、3カ月間、730点超レベルの問題集で傾向と対策を行って、応募前に全ての募集案件に応募可能なスコアを取ることができました。

応募から派遣まではどんな流れでしたか。

退職直後に応募する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で募集中止となり、再開された2021年の春募集に応募しました。所定のログインページで経歴や各種小論文課題を記入し、別途、健康診断書を郵送しました。これらをもとに1次選考が行われ、Zoom面談による口頭試験の2次選考を経て、同じ年の秋に派遣候補者として合格通知を受け取りました。その後、2022年4月から約70日間、国内のJICA訓練所で語学訓練を主体とする研修を受講し、最終試験を経て、正式な派遣が決定しました。

派遣先がブータンと聞いていかがでしたか?

きのこ栽培の募集案件は稀で、ブータンが唯一の募集案件でした。私はヒマラヤ山脈の周辺国への派遣を希望しており、幸運にもその一つが派遣先となりました。ブータンは世界有数の生物多様性を持つ国なので、有用食用菌類の収集も期待していました。

ブータンでは、具体的にどのような活動をされているのですか。

首都ティンプーの国立きのこセンターに所属し、原木シイタケとヒラタケ栽培の安定性向上、ナメコなど新規きのこの栽培法や品種の開発・普及を支援しています。

赴任の約2週間後に発見した野生ナメコは、3つの地域での試験栽培と現地ホテルや日本食レストランでの試験的メニュー提供を経て、今年からブータン国内各地で本格



FAO（国際連合食糧農業機関）プロジェクトの活動として、全国のきのこ担当普及員を対象とした研修会を開催



ブータン国内の複数の場所で、地域住民に向けナメコ栽培とFAOプロジェクトの概要を説明し、生産者グループの結成と事業への参加を促した（左右の写真とも、スクリーンを前に説明をしているのが熊田さん）



FAOプロジェクトの事前準備として現地研修会を開催した

栽培が始まります。この取り組みは行政や国際機関から期待され、国際連合食糧農業機関や政府からの予算もつきました。

将来的には、原木を用いてブータンの自然環境下で栽培した貴重なナメコを、日本へ輸出することを目指しています。東日本大震災後に多額の支援を頂いたブータンと福島県発祥のナメコにより両者の絆を深めたいという想いも胸に、様々な関係者と連携しながらナメコを中心とした多様なきのこ加工品の商品開発に取り組んでいます。

ブータンで活動する中で大変なことは？

この国のシイタケは、干シイタケに加工すれば日本への有力な輸出品目となることが期待されます。そのため施設内での栽培から森林内で自然発生させる干シイタケの方式への切り替えをお勧めしていますが、どの生産者も消極的です。治安が良く信頼できる国民性であるにもかかわらず、野外にあるきのこは天然か否かに関係なく持ち去られてしまうというのが、その理由です。

一方で、ヨーロッパで珍重されるポルチーニ茸や日本の信州で高価な茸・クロカワは、食用菌であることを知らないため採取されず、森林内に残っています。今や日本への有力な輸出品目に成長したマツタケも、以前は誰も採取していませんでした。生物多様性に富むブータンの森林は、有用食用菌類や薬用植物の宝の山ですが、住民がその価値に気づいていない地域も多くあります。

そんな中、高級品のマツタケや冬虫夏草の産地となった地域では、住民の生活は大幅に向上しましたが、同時に伝統的文化と住民の関係の変容をもたらし、地域の経済開発の負の影響を痛感します。

では、現地で生活する上で大変なことは？

仏教国であるブータンは、全ての生物の命を大切にしています。このため、街の至る所に丸々と太った野犬がいます。彼らは、昼間はおとなしく寝ていますが夜は危険な存在に豹変するため、入国時から夜間の外出を避け十分に注意を払っていました。それでも、配属された最初の週末、野犬に噛まれてしまいました。傷は深刻ではありませんでしたが、出血し、狂犬病感染の恐れがありました。発症すれば100%死亡するため、直ちに病院で適切な処置を受けました。

派遣後、ご自身に変化はありましたか。

海外から日本を見るという経験を通じ、日本で当たり前のこととして享受してきた社会的恩恵は、海外の視点では極めて特殊であることを知りました。その恩恵に気づくことなく不満すら抱いていた過去の自分の無知さを、恥ずかしく思いました。

やりがいを感じるのは、どんな時ですか。

ブータンでは地方の過疎化と人口の極集中が日本以上に進んでいますし、賃金水準の低さと年金制度への不安から海外移住者の割合が人口の1割を超えています。過疎化が進む集落でナメコ栽培などを普及させる

ことは収入源として期待され、研修を熱心に受講する住民に接した時にやりがいを感じます。新規事業を提案した際、そこに希望を見出した一部の若者が参加したいと意思を示してくれた時も、やりがいを覚えました。

活動を通じて得られたことは？

「公」より「私」を優先し、周囲の目や批判を気にしないブータンの人々の仕事ぶりに接し、日本でいかに不要なストレスを抱えて仕事をこなしてきたか痛感させられました。

また、お葬式にも数回参列して、この国の死生観を垣間見ました。日常の些細な出来事も死も自然な運命として全て受け入れる姿勢は、過度の努力を避けるという負の側面がある一方、常に心の平静を保つマインドフルネスな生き方には有効だと感じました。ブータン人の生き方や価値観に、社会の責任や重圧から解放された60代という年代で出会えたことは、個人として残りの時間をいかに生きるかを考える際の大きな示唆となりました。

読者に向けてメッセージをお願いします。

私は55歳を過ぎて毎日仕事と子育てで手一杯で余裕がなく、退職直前まで大した準備もしていませんでした。退職後に海外で活動したければ、語学の検定試験は少しでも早い時期に受験することをお勧めします。勉強のためテキストや問題集を見ることが、老眼が進行した身には過酷ですし、学生時代から遠ざかるほど能力を取り戻すのに時間がかかりますよ。